

P1-34-9 ダグラス窩深部内膜症を合併した下部腸管内膜症に対する腹腔鏡下手術の有用性の検討

順天堂大

北出真理, 熊切 順, 菊地 盤, 松岡正造, 地主 誠, 竹田 省

【目的】当科における腸管内膜症の治療指針は、MRIゼリー法や注腸造影で病巣がRa以上でかつホルモン療法が無効の症例に対して、外科的切除を行っている。腹腔鏡下に低位前方切除術を施行した腸管内膜症9例の術後経過について検討した。【方法】腸管子宮内膜症の診断で、腹腔鏡下に低位前方切除術を施行した9症例を対象とした。平均年齢は 35.1 ± 4.6 歳で、全例に排便痛や血便等の消化器症状を認めた。腸管内膜症の部位はS状結腸が1例、直腸が8例(Rs:5例, Ra:3例)であった。手術方法は、深部内膜症によるダグラス窩閉塞の剝離を行い(central partからside wallまで)、切除部位の腸管を授動した後、自動吻合器を用いて低位前方切除術を施行した。【成績】合併疾患としては、膀胱子宮内膜症が1例、回盲部内膜症が1例、卵巣チョコレート嚢胞が2例にみられた。全例に深部内膜症によるダグラス窩閉塞を認め、r-ASRMは 60.7 ± 28 であった。組織学的検査では内膜症病巣の深達度は全例で固有筋層を越えており、線維化や平滑筋化生を認めた。月経時疼痛のVASは、術前： 8.6 ± 1.2 →術後： 2.7 ± 2.3 と有意に低下し、低用量ピルによる術後維持療法を行ったのは2例のみであった。卵巣チョコレート嚢胞の新生が4例にみられたが腸管内膜症の再発例は皆無で、1例に妊娠が成立した。【結論】腸管内膜症に対する腹腔鏡下低位前方切除術は、症状の改善に大変有用であった。

P1-34-10 子宮内膜症女性に対するGnRHa療法が血管内皮機能、糖・脂質代謝、酸化ストレスに与える影響

愛知医大

衣笠祥子, 二井章太, 渡辺員支, 篠原康一, 若槻明彦

【目的】子宮内膜症を有する女性の血管内皮機能は低下しており、将来の心血管疾患(CVD)のリスクになる可能性を報告してきた。GnRHa療法は内膜症治療には効果的だが、血中の E_2 濃度を強力に低下させ動脈硬化に促進的に働く可能性がある。今回GnRHa療法が血管内皮機能、糖・脂質代謝、酸化ストレスに及ぼす影響を検討した。【方法】子宮内膜症患者12例を対象とした。GnRHa療法として酢酸リュープロレリン1.88mgを4週間毎に4ヶ月間投与し、治療前と治療後4ヶ月で、1)血圧、脈拍、体重、2)血中FSH、 E_2 濃度、総コレステロール(TC)、中性脂肪(TG)、LDLコレステロール(LDL-C)、HDLコレステロール(HDL-C)濃度、HbA1c、HOMA指数を測定した。3)活性酸素の指標であるd-ROM、抗酸化因子であるBAPを測定した。4)前腕部を5分間駆血し、その前後の上腕動脈の血管拡張反応(FMD)を測定し、内皮機能の指標とした。本研究は当院倫理委員会で承認を受けている。【成績】1)血圧、脈拍、体重は治療前後で有意な変化はなかったが、FSH、 E_2 濃度はいずれも治療後で有意に低下した。2)TCは治療後で有意に上昇し(187 ± 25 to 206 ± 25 mg/dl)、LDL-Cも上昇する傾向を示した。TG、HDL-Cはいずれも治療前後で差を認めなかった。HOMA指数は治療前の 1.0 ± 0.4 から治療後の 1.4 ± 0.7 へと有意に上昇した。3)血清中d-ROM、BAPはいずれも治療前後で有意な変化を認めなかった。4)FMDは治療前の $7.1 \pm 4.8\%$ に比較し、治療後に $1.4 \pm 2.5\%$ と有意に低下した。【結論】GnRHa療法は E_2 濃度を低下させることで、インスリン抵抗性や脂質異常をきたすことが示された。また内膜症患者で低下している内皮機能をさらに低下させることからCVDリスクを上昇させる可能性が示された。

P1-34-11 悪性腫瘍治療による性腺機能障害に対する専門外来についての検討

聖路加国際病院女性総合診療部

塩田恭子, 堀井真理子, 真島 実, 彦坂慈子, 漆原知佳, 秋谷 文, 酒見智子, 斎藤理恵, 山中美智子, 百枝幹雄

【目的】悪性腫瘍治療の中には性腺機能障害が生じる可能性のある治療も多い。悪性腫瘍治療による性腺治療障害に対しては、生殖医学のみでなく、悪性腫瘍治療についてある程度精通している必要がある。このため、我々は一般の不妊外来ではなく悪性腫瘍治療による性腺機能障害に特化した専門外来を行っている。本研究の目的は、この専門外来の診療について検討することにより、悪性腫瘍治療による性腺機能障害に特化した専門外来の必要性を明らかにすることである。【方法】倫理委員会の承認をうけ、2006年6月から2010年5月までの4年間に上記専門外来を受診した113例の性別、年齢、受診の時期、主訴、治療などについて検討を行った。【成績】受診者の性別は女性が85例(75%)、男性が28例(25%)であった。平均年齢は女性で 34.3 ± 6.6 才、男性で 30.0 ± 8.2 才であった。受診時期と目的は、女性で77%が治療前の受診であり、その主訴は全例が治療により性腺機能障害がおこる可能性およびそれについての対処法を知りたいであった。33%が治療後の受診であったが、その主訴は卵巣機能の評価、育児希望、月経不順などであった。男性では1例を除いて治療前の受診であり、治療により性腺機能障害を危惧し精子凍結を行いたいということでの受診であった。性腺機能温存治療として、女性10例が胚・卵子凍結(胚凍結3例、卵子凍結7例)を、男性25例で精子凍結を行った。【結論】男女ともに、悪性腫瘍治療での性腺機能障害について危惧し、性腺機能温存を考える例が多くみられた。今後さらにこのような専門外来が必要であると考えられる。